

入選

※十五首のうち、八首を抄出しました。
都道府県別名前五十音順に掲載しております。

雨

木立 徹（青森）

妻も子も去りたるわが家今日からはしんと静まり雨だれの音
雨がふるトッテンパラリン雨が降るトピチピテシャンわが胸にふる
突然に慌てふためく人の顔水晶体の雨がみてゐる
通り雨に傘を持たざる人たちがみな小走りに地下街へ消ゆ
さはやかに晴れたる秋の日は暮れて裏切り者のやうに降る雨
雨の日は心の裾が濡れるから部屋に籠りて聴くブラムス
春の日に真昼明るき白き雨暮れて冷たき銀の雨ふる
うたびとの言霊として降らす雨地に沁みわたれ芽吹き春に

風の歳月

中里茉莉子（青森）

綻びし母の野良着をつくろえる今宵ひたひた雪解くる音
たつぷりと薬味を添えて馬刺し食う原始時代の記憶もつ舌
梅干しの色に染まれる白飯のうまし遠き日の日の丸弁当
切り売りの西瓜は買わぬ幼き日の夏の記憶が崩れゆくから
一日の時間をひとり占めにするケイタイ持たぬ空は快晴
強引に可決してゆく様に似て台風の渦黍畑なぶる
くれないの千の指先反らせつつ曼珠沙華咲く母亡き庭に
還るなき父の頭蓋の何処にか七十年の風の歳月

蔵王山と万華鏡

大滝 慶作（宮城）

二十年眠らせて来し「心理士」のほこり払いてカウンセラーとなる
週一度相談室に出勤す蔵王の夕焼け身に浴びながら
生徒らの話す中身は万華鏡日毎に変わる絵模様見つめる
孫ほどの生徒と対話成立す わが日本語はふところ深し
よく聴けば震災の日の傷跡は小箱に入れてしまいいりたり
生徒らが毎夕食べる給食は出来たてその上薄味で美味
定時制の授業を一こま任されて「会話はキャッチボール」と話す
定時制を卒業したる大男にひそかに告げる「いつでもおいで」

人參ジュース

小野寺 寿子（宮城）

春の野に白詰草の花飾り忘れしままに六十年過ぐ
われ描きし珊瑚樹の実に色塗らぬ空白ありてそのみ光る
降りしきる雨のカーテン開けたなら別の私が笑っていそう
敵来れば飛び去るといふ帆立貝飛びたきわれの敵はわれなり
男心わかったふりで彼岸日におはぎを作る二人で食べる
献身の鶴女房になれずして子の無きままに古りてしまえり
退院の私に夫の弾きくれし「ジュピター」の音があの日を許す
少しでもあなたと長くいたいから朝朝つくる人參ジュース

紅き雛罌粟

角田 正雄（宮城）

五年目を競ふ報道にぎやかに通り過ぎたり被災地の宙
五年経て色褪せること無きままの時々刻々を残すケイタイ
幾万の暮らしと嘆き覆ふがに新たな街の高上げ進む
駅前商店街と交流館ならびて明日の賑はひを待つ
口口に声なき声を叫ぶがに大川小の残されし窓

浚はれし数多の暮らしそこかしこ更地に揺れる紅き雛罌粟
北上によみがへりたる葦原の丈低けれど刈り跡の見ゆ
五年経し苦勞話にうら話おもひ掛けなき再会に酔ふ

蝦夷の風を行く

氷室マユミ（宮城）

風かよひレンゲツツジの香りくる種山ヶ原の草原を行く
銅像の又三郎にふく疾風まさにマントを翻すごとし
人首と書きてひとかべと読む地名蝦夷の悲劇いまに伝へつ
風さやく胆沢城址の草原にコウゾリナの花むれて波立つ
みちのくに突如建ちたる胆沢城朝廷の威力見せしめたりき
国史にはアテルイが助命を嘆願すとあり信じがたき英雄の最期
アテルイは中央にては悪人かみちのくに今も英雄なるぞ
孫の語る「日本の母」の伊藤尚いつしか耳をそばだてて聴く

苦渋の決断

齊藤 忠弘（秋田）

田植機を押しして四里を行く日々これがモデルの農かと自問
薄明に苗積み暮れて戻る日々足肩痛み気短かとなる
飯受けの農地の没収声高に国は迫りぬ稲の青刈り
黄ばみたる稲に放火を促してその場離れぬ国家公務員
米積みし車拳げんと検問す警察に時代は一挙に逆行
夢奏えて行き詰まりたる仲間より離農者自死者相次ぎ出たり
契約の時効となりぬ十年目晴れて全面稲を植えたり
二千万円借りて自前の工場建て設備構える苦渋の決断

茜の中へ

篠田和香子（秋田）

春の陽が翳り野点の毛氈の緋色がゆれてはつか濃くなる

曼珠沙華の不規則にゆれ父逝きし日がたちかへる八月真昼
草を打ち茜の中へ駆け行きし弟老いて異国に住めり
柿色の単衣の裾の裏がふと侘しくなれば九月が終はる
通町を踊る狐の行列のあとから斜めに降る細き雨
雪の降る微かな音のふり積もり二月の夜が蒼くしづもる
雪の下に土が見えきて呼吸する草なまなまと匂ふ畦道
草も花も芽吹きて雨に伸びる頃私は冷えて繭籠るなり

雪の降る音

多田 草（山形）

撞球のごとき音させ猫の子が胡桃の殻をころがしてゆく
柀のはな咲きそむる路地をゆく雲ひとつなき空をあふぎて
手を離せばどこまでも走りゆく子ども振り返るといふことを知らない
土塊と見れば虎猫うづくまる雨はいつしか雪にかはれり
雪の降る音聞くごとくふたもとの樞は立ちをり時の随に
ハワイなうハリウッドなうパナマ・シティなうぼつぼつと届くメールに
支持率がふたたび上がる去年のデモ祭りのごとく果ててひととせ
遠雷にいつしか蟬の声のやみ猫はねむれり四肢をのばして

永遠の影

伊藤 雅水（福島）

海霧のきらら町々過ぎてゆく鉄路はセシウム濃き地につづく
黄に透る漬菜なつかし赤彦のうたが暖簾にありしふるさと
故郷を恋へどいわきに五十年親しみ暮らす詭うすれて
寺を決め墓所定めたり潮の音聴きつつ夫とこの地に眠らむ
シングルの息子が墓守するといふ憂ひ消えねど少しうれしい
永遠の影もつ月の澄みとほる光に今宵濡れゆくばかり
汚染され戦の絶えぬこの地球を目守るがごとく空に月あり
福島の人でなければ解らない思ひのありて寂しさ過る

「夏の屋根は戦場だぞ」 小貫 信子（福島）

初春の仕事始めは塗り替えの広らな屋根の見積りなりき
「夏の屋根は戦場だぞ」と亡き義父のことは身に染むきよりの暑さよ
ひもすがらコールドタールを塗りゆけばいつしか鼻が麻痺していたり
塗り替えの済みし急なるトタン屋根夏の日差しを跳ね返しおり
もう少しだけ頑張れと涼風が麦藁帽子のリボンをゆらす
働きて蹠鞘炎になりそうな右手中指こんなに曲って
霜柱さくさくと踏み外壁の塗装準備の脚立を並める
わが師なる義父の塗装を見るような高屋根の上の夫の刷毛捌き

六月の森 糸井 孝（群馬）

みちのくのみづの酢の物せりせりと身より立ちたる音の涼しき
礼といふさやけきことを木々になす六月の森深く分け入り
雨ガッパの重きをぬげば六月の雨に濡れたる木々の息づき
白神の森登りきてしばらくを水音のやうな風音を聞く
マザーツリーその名に魅かれ来たるかな不意に歳月越えし氣のする
ぶなに湧く風の眩しさ胸元へ我も一本の木筋のよき木よ
葉もれ日を踏みて水場へ列をなす夏鶯の声のひびかふ
躓きゆける夫との距離を思ひつつたれかれの詩そらんじ歩く

指 岩本 実佳（埼玉）

思い出を消そうとすれば消しゴムのカスに黒さの思い出のこる
ホチキスはパチンと紙を一秒で過去へ戻れぬ切符手にする
マスキングテープのやわく剝がれ落ち今日を過ごして明日は明日
筆箱に明日書く文字の楽しみを二十歳の指はペンをそろえたり
クリップの光りにまなこ奪われて春の出会いの始まる廊下

オンとオフとの切り替えを繰り返して今日はおもてのセロハンテープ
もうこれで最後なのか4Bの鉛筆で描くねこの背中
アナログのままでもまだいい封筒へ万年筆を霞ませてゆく

十五歳のくちなは 針ヶ谷乃里子（埼玉）

反論をつよく返してそののちは昨日より少し近づいてくる子
悲しいと言はむとすればムカツクになる十五歳に棲めるくちなは
性善説を否定したがる子ら多く風の一日がはじまつてゆく
感覚の確かな心へを待つてゐる握手をするとさみしがる子は
こたへやうのないことを聞きみでした十五歳といふおもさやはらかさ
われもまたくれなゐといふ吾亦紅氣づいて欲しい子がここにもある
水曜日さみはさみしい時にだけふいに現れる仔猫みたいだ
きみの目ははちみつの色点描に明るみてゆく午後の図書館

丸文字の手紙 森 暁香（埼玉）

一人またひとり静かに入りてくる支援教室ゆふべに灯る
六分の一は貧困児童とぞ ボール蹴る子ら木に見え隠る
「教ふるとはともに希望を語ること」屈まつてゐる背なを伸ばさう
ひとりづつ素の表情を見せはじむ塾に行けぬ子みなここに来て
物陰から少女そうと差し出した五枚つづりの丸文字の手紙
靴ひもが解け全力で走れないくらゐで行かう 春の坂道
日の入りが五十分伸ぶ五十分の光の束が床に拡がる
花芽いま闇に呼吸す雷去りしのちの樹木にながき黙考

素描の日々

飯坂友紀子（東京）

窓際に座る無口な少年が描きたためている雲のスケッチ
一本の線も取らせず飛び立った鳥を生涯描く画家がいる
地下鉄を出て乗り換えの数秒に見る青空を葉にはさむ
イヤホンのガイドを外す耳元で囁きかける肖像の人
大作を過ぎて小さな晩年の素描の空に浮かび来る青
ひとすじの永遠と交差するように電車は光る川を渡りぬ
何処へでも飛んでおいきと放たれた小鳥は今日も巣箱に戻る
一日を水にほどいて眠りとは絵筆を洗う静かな時間

炎の旗

海野 隆光（東京）

流水に持ち上げられて廻りたる水車のきしみ春のおとづれ
若布舟波を通すと揺れにけり大型船は波うちかへす
はち蜜の長き滴り春の風邪紅茶のレモン浮き沈みをり
人力車夕立のなか走り来るしぶきあげたる車輪の大きさ
いつせいに傘すれ違ふ交差点傘高くして触れることなし
浴衣着て手足を余す異邦人頭を低くせる日本の家屋
焼却炉燃えてゴトゴト蓋が浮き炎の旗が外にでたがる
森中は風の及ばず倒木の古苔は露のひかりをまとふ

剃きたての今日へ

泉 茫人（東京）

刺すような裸足の冷えの鋭さを踏み板にしてこの身を起こす
一杯の水の重さを掌に受けてひと日のはじまりとする
冷たい水が喉を伝って落ちるとき身体まるごとスケルトンになる
フロリーングを仮の大地と大の字に足・腰・肩の関節揺らす
じゅわじゅわつとトマトジュースの沁みてゆく細胞ひとつひとつの隔壁

皮と実の間がとりわけ滋味深く汁滴らす完熟ブルーベリーパーフィルターの上で熱湯含んではコーヒーの粉ぶつくり膨れる
できるだけドアにかけるのは左手で剃きたての今日の外気へ踏み出す

屏の中の将棋教室

小椋 信（東京）

風寒き拘置所の門くぐりつつ我待つ受刑者の顔思いおり
時雨つつ夕闇迫る拘置所の将棋教室の駒音さやか
盤はさみ駒に託して「棋の対話」交わす受刑者名前は知らず
将棋指す受刑者穏やかに笑み交わすこの温もりを育て高めむ
心身のケアと更正を願いつつ受刑者に説く勝負の美学
刑期終え退会告げる受刑者の秘めたる決意信じ見送る
前科の身に吹く世の風は痛くとも翔び行け内なる翼広げて
前科者暮らしの輪から排除して人は不条理の科犯とがわかし生く

地球儀と雨

柴田 葵（東京）

地球儀の青い部分の糊づけの甘さ浮きたつ霧雨の午後
まさかとは思ったけれど「ソビエト」と地図上の字は小骨のように
台座には「にゅうがくおめでと〜」なんておまえいつまで祝っているの
妹のまあるいおかつぱ頭から街路樹生えた写真一葉
なか七日そのうち五日は雨だった、と二十四年も語られる雨
父と母と妹と皆で旅をした最後はいつか われらは木立
あしたには出社する旨メールしてその手で傷んだ蜜柑を捨てる
両親に貰った地球儀、ではなくて、地球儀は場所を取るのだ割と

優しき母性

杉本 聡子（東京）

翌日に仕事があればやめられぬ不妊治療に通いし晩夏
行ってみて不妊治療の名医なの 白き名刺のカドは尖りて
あきちゃんも四十歳を過ぎて産んだのよ 優しき母性 兄嫁の母
お舅さんの生まれかわりが授かるわ 葬儀の席の慈母のほほえみ
後継ぎを生むこそツマノシアワセと疑うことなく生ききし慈母よ
舅逝きて十五回目の秋が来る鳥の子色の月昇りたり
子のおらぬ二人の暮し二十年 いつしかうさぎと三人家族
秋風は金木犀の香りしてうさぎと暮らす部屋ふきぬける

むらさき色の影

竹内 通代（東京）

ま昼間の寺庭婦人の会合に読経をするかが議題に上る
断りの電話を入れれば後悔が夜の果てまで響きてをりぬ
はつ秋の色無き光が合はさりてむらさき色の影が生まれる
人形の頭を逆さに持つ子ゐてあるがままにと我は直さず
燃りのある絹糸のやうに降る雨は九月の空に澱みを添へつ
ほろほろと言葉に出せば腐りゆく知り得るすべてを枉げてはならず
ときどきに若奥さんと呼ぶるを二十歳になつた娘が笑ふ
〈幸せ〉は専門用語なのだらう路上に女がささやく歌の

八月の司書

志稲 祐子（東京）

カーテンを開ければ参考図書室に〈禁帯出〉の朱が目覚める
白杖を握れる人の来館に一段あかるい顔にて応ふ
十冊の図書と絵本を借りていく父子の会話のほほえましきよ
クレームのありてひとときは鮮やかな向日葵色の館長の声
黙々と作業するタイプと組めば試されずにすむ雑談力は

昇進の予定などなし面談は褒めてもらつて五分で終はる
疵がつき捨てるほかないCDに原色の虹かがやきやまず
図書館の夏の終りは子どもらの「読書感想文の本どこですか」

片だより

橋本 淳子（東京）

しょうらいのゆめはなにかな将来が少しく怖い還暦の吾の
野の花の笑いころげる春の日にまるっと消えるゆめそれは夢
逃げ水の逃げる刹那を見ることに取り組みながら影ひとつ行く
そよ風のようにほろかな日々の吾を撫でにゆこうか翼はいらぬ
文部省唱歌を歌うそのむかし先生なりし母のかたえに
慈母が夢は光の如く直進し倦まず弛まず子に向かうなり
あけそめて梅ひと枝に宿る香と笑みをかわせば如月の風
使うほどがたつくこの身に歩み寄り時をシェアする頃合いとなり

地下水族館

森 祐希子（東京）

駅を降り左へ回れば植物園、右に進めば国立公文書館
三つ折りのリーフレットに記載なき水族館は洞窟めきて
大西洋近き国にて展示さるアジアに住むとう兵 兎 鮎
口を常に真下に向けて立ち泳ぐレイザーフィッシュの背骨かなしき
学名はバラキユキマリアトリコロル美しきナマコの唱うる呪文
海藻のみ展示されたる水槽の四つありそれを見つむる人あり
左巻きに下りし階段右巻きにのぼりつめればヤシの木を超ゆ
古文書の海に潜りて 浮き上がるためにはどうか青空がいる

夏は死の

太田 宣子 (岐 阜)

死は夏の暗喩となれず絶対といひきれることのひとつも持たず
とほからずおもひだされる側へゆく ありがたうと言つて別れる
日傘まはすきみが死んだらきみのなかのわたしも死んで夏とめどなし
からつぼのてのひらに夏からつぼのカバンにも夏びつしりと夏
蟬の死もひまはりの死もからからと わたしを巡るみづのあやふさ
なにもかもが自分のためとふ退屈よこぼれたジャムのあかるさを拭く
風死んでわたしも死んでべらべらと八月三十二日の月は
夏ゆきて夏のおもかげ ベランダに土のこぼれてにほひたつ朝

羊水

細江 寿満 (岐 阜)

超音波四次元画像のデータを動画に観ており母となる娘は
胎嚢は生命の宇宙胎芽鰓・尻尾のありて魚のごとしも
胎内に母の鼓動を聞きいるか胎児安らに唸閉じたり
六ヶ月生殖器官整いて一筋うすきべにをひきいる
臨月は五感発達おおかたの臭覚味覚判りいるとぞ
味覚いや臭覚が先羊水は母の匂いのあふるる泉
「ブルーツ」と震うは胎児のなす尿羊水浄化に育ちゆくなる
新生児エンゼルスマイル羊水に見たりし時と同じ笑みして

風織ければ

春野すみれ (静 岡)

流れくることは掴まむ秋空のかく澄みたれば風織ければ
五つ六つ飾りのやうに実をつけて駅舎のわきの一本の柿
山峡をよぢれつつゆく蝶ふたつ空のくぼみに消えてゆきたり
近よれば息づきをらむわたしにはひたすら遠いあの梢たち
いろ深きよどみにうつる橋のかげ手を振れば吾が影も手を振る

突つつけばすぐにもニャオと鳴きさうな猫のかたちの目覚し時計
海ほほづき欲しと言へずに祖父のあとただ徒きゆきし観音まゐり
七十年われを支へて来しからだ白く濁れる湯に沈めたり

太極を舞う

今泉 一夫 (愛 知)

曉に野馬分鬚をひとり舞うシルクロードの調べに乗りて
踵から下ろせば妻は爪先と譲らざるまま右蹬脚舞う
天津に昇る朝日は楊師家とおろがみて舞う六十九名 (天津)
射るときまなこで表演終えし子のはにかみて汗拭う仕草よ (天津)
「楷の樹碑」除幕の式のすすむなか遙けき国の孔子廟思う
春の野に太極拳を舞うあした花は光りて手の平に降る
「ゆる論」に骨や筋肉緩めるを聞きて頷き舞いて頷く
老大師「万法帰一」を説かれたり心に秘めて太極を舞う

地球儀回す

林 建生 (愛 知)

戸籍には満州国と書きあれば地球儀回すくるくる回す
故郷の色も匂ひも知らざれど黄砂の風を吸ひ込んでみる
雑魚寝してすいとん食みていさかひも笑ひもありしちやぶ台の部屋
米借りてお味噌も借りて子のためにいつも頭を下げてゐた母
給食の脱脂粉乳焦げ臭く鼻をつまみし敗戦の味
オルガンを囲みて友と歌ひしは赤とんぼとかメダカの学校
なにゆゑに我は彼の地に生まれしや問ふてはみても墓石応へず
地図になく記憶にもない故郷に帰る術なく今日を生きあふる

母

山本 公策 (三重)

若き日の母の写真のその下で妻とわれとでズボンを着かす
何もかも分かつていさうなおふくろに「特養」の話しを躊躇ふ
明日には入所の母と三人でお内仏の前で正信偈誦す
学芸会の演技のやうに母が言ふ「ああ美味しかつた」湯呑みを置いて
住民票が今日から別のおふくろは小雪舞ふな手を振りて往く
子供四人孫が六人ひ孫十五、母さん誰を行かせませうか
われは母を母はわれをじつと見る施設を訪ねし始めの一秒
子供らに涙も見せず愚痴もなく九十三歳に母なり給ふ

思春期を精一杯生きる中学生(保健室より)

塩見すみ子 (京都)

アメを食べエロ本広げ目を向ける生徒らは無言赴任せし我に
グルーブの諷い続きで得し疲れ保健室にて癒す女生徒
「吸わへんか」先輩の声にドキドキと手にしたタバコ今は離せぬと
「湿布して」涙で見せる青いあざ父に殴られ怒りの登校
「絶対に捜さないで」と家出せし生徒より届くメールに安堵す
保健室に給食運びて声かける友の支えに笑顔返す子
母の言う庭の紅葉の美しさ季節も知らずに自室にこもる子
「止めました」先輩からのメッセージ全校生聞くタバコ集会

廃線の町

鳥 居 (大阪)

天の矢へ向けるまばゆき的として向日葵咲けり廃線の町
浜風のめくるノートに線ほそき船の構図は展かれてあり
葡萄の実したたるほどの一言が夜明けの交差点に匂えり
飛び石のふいに途切れる虹の根を捜して迷い込む葦原に
遙かなる水の記憶を解きながら薄紫にひらくあさがお

かき氷の山頂付近にほのかなる静電気もつ匙をおるせり

雲の峰白く湧きつき飛び込み台の少女が夏の芯として佇つ

ひとなつのプールの波が水面に編む ゆるやかなひかりの投網

わたくしを知らない町

大江 美典 (兵庫)

園庭に忘れ去られた飛行機の遊具は今も空を夢見る

少子化の波にひたして濡れる足生まれた町を出ることもなく

思ひ出は頭蓋のうちを巡るだけ何処にもゆけない回転木馬

駆けてゆく少女が揺らす夏帽子羽化した蟬はいまだに濡れて

飛び立てる羽はあれどもわたくしを知らない町では生きられなかつた

幼子の笑顔を守る樟はけふも大地に深く根を張る

樟に降りそぐ陽はやはらかく根方の少女はいつかのわたくし

この町にも未来は生まれいづるのか杉のかをりの園舎新し

燕来る

藤本壽美枝 (兵庫)

物置の灯の傘の上に土積まれ家に初めて燕の来た日

幾筋も飛行機雲の見ゆる朝我家の燕は巢ごもり始む

孵化知らすごとく卵の欠片落つその小ささを夫の掌に見る

餌を待てる嘴巢よりはみ出して子燕四羽生まれるを知る

親燕迷うことなく真つ直ぐに四羽の雛待つ巢に戻り来る

電線にひたと寄り添う子燕は心細げに目を動かしぬ

こんなにも大小ありて電線に並びて止まる燕の親子

壮行の儀式にも似て帰燕を五十、六十と数える夕べ

潮鳴り

西村 道代 (和歌山)

照りかげり時雨降るけふ海中の島より虹の幾度も立つ
風つよく晴れたる昼に白雲の影が山野に町に移るふ
海風ぎて静かなる夜半月光に入江の島の島は淡く浮かべる
遠山をおほひつくせる棚雲のおごそかにして近山に消ゆ
虹二本柱のごとく対ひ立つ天神崎の漁港の夕べ
低気圧なまあたたく流れこみ洗面台の鏡を濡らす
山裾のもやとなりたる薄雲に夕日及びてあはき淡紅
身のめぐり音の絶えたるひとときを潮鳴りに似る遠き街音

ふろふきのやうに

平尾三枝子 (岡山)

本棚の奥へ奥へと埋もれゆく『されど われらが日々』捨てられざる
映像化してほしくない幾ひらの本を心に隠してをりぬ
八月の卓に並べる『戦中派不戦日記』とチーズ肉トロ
響きこし言葉に貼れるさみどりの付箋そよぎて林となりぬ
大いなる時の隔たりなきごとし陽だまりで読むラ・ロシユフコー
花布はヒユガミズキの淡き色漱石全集書架にまどろむ
一冊を抜けば漱石倚りかかる時代を超えて羽田圭介に
煮つめられ深み増したるふろふきのやうに生きよと長田弘は

環

瀬戸内 光 (山口)

はめ殺しの窓より入り来し夕陽せきやうがしばらく部屋のひとところ占む
ためらいも未練も切り捨てヨーヨーを放てば揺るる行き場なき水
大いなる画布に螺旋を描きつつ花火が昇る先発の花火
朝影をさざ波と化し揚羽とぶ小刻みに翅をうち振りながら
足一本残してガガンボ去り行けりさりげなくはた些事のごとくに

闇いまだ深き部屋より差し出せる手の白さより明け染めにけり
飽くこともなく啼き続ける鼻よわたしはわたしの環ぬけられぬ
指先が目には見えざる物を見すあなたと指をからめていれば

阿豆枳

大谷多加子 (香川)

乗り降りのひとなく三分停車せる「根雨」駅過ぎてひとりを恋うる
胸すこし開けて迎えし七十の坂にあかるむ野火のせつなし
ハードルを下げてときの間活気づく七十代のつくつくぼうし
この夏のしおからとんぼ鬼やんまスライドされて過るあきあかね
天に住める群れを羊と信じいしカルデアの星は万華鏡なり
国生みの阿豆枳神社に鈴をふる卑弥呼に似たる島の少女子
阿豆枳島、小豆島から小豆島空になぞればひびける阿豆枳
かご屋、たる屋、鍛冶屋の屋号獅子舞の秋の笛が攫ってゆきぬ

末梢神経

堺 多鶴 (福岡)

逝きてはや三度目の秋いつの日もあなたは影のやうに寄り添ふ
葡萄の名はロザリオビアンコ薄皮ごと食みて今年も秋深みゆく
博多湾の焰のやうな落日にさらはれさうな小さきアヲサギ
バックンとアボカドの種取り除く五十歳ごじふになるも子供は子ども
ひと株が一畳ほどにも広がりて十二単は庭に主張す
キーウイの種舌先に探り出す末梢神経いまだ健やか
ああこれは楓を朱く染める風けふ出来ることけふ遣りおかむ
連なれる奇峰のやうな雲消えて空透きとほる台風一過

横たはる樹

嶋津 裕子（福岡）

真つすぐな横線の雨とんでゐる硝子のそとは暴風域に
緑陰にひかり射し入る山の斜面大樹の茂り倒れてゐたり
声のなき声あげ地をあげ根をあげて柵の太き幹は地面に
倒木はまだ生きてゐる枝々の濃みどりの葉はひかりをかへす
がうがうと山水しろき沢のそば横たはる樹よ空ひろびると
歩行器の母と桜の末あふぐ右手の山は樹のねむる山
ははその母は骨折横たはる細き足なづ枝なづること
ダムの辺の木々のしげりに目を凝らす風のしづかな秋ちかき朝

地震を越える

沖田須磨子（熊本）

ねぎらいを頂きながら余震なおつづける朝新聞配る
地震におびえ避難の人へ確と渡す絆の証のにぎりを十個
終息の見えぬ地震の怖ろしさそれでも我は新聞配る
雨の日を車中に過す人見つつ傷む心に新聞配る
鉄路こえ新聞配る被災地は仮設入居の始まりており
半壊の家の庭先あじさいが雨に打たれて重たく咲けり
やさしがる蛍の光目に追いて余震の不安を忘れていたり
選挙にて二時間遅るる朝刊を配れば朝餉のみそ汁香る

山に生きる

西梅 芳久（熊本）

山の神畏れ敬ひ切り株に酒塩供へ無事を祈れり
地下足袋に脚絆の父は斧研ぎて土色鉢巻き横結びにし
薄暗きランプの下に夕餉せし遠きかの日よ父を上座に
父の字で「山に生きる」のアルバムに母の写真の大きくありて
山深き原生林の木馬道高き棧橋父は走れり

鳶口と鶴嘴を持つ山師らは太き材木馬に載する
山の神祭りは男の衆寄りて猪肉肴に焼酎酌めり
新しき法被を羽織る山師らは熾を立てて初荷見送る

熊本地震

吉田 尚子（熊本）

ドンと来て上に左右に続く揺れベッドの手すりにしがみつくのみ
電灯の傘はいずれも傾けど落ちてはおらず壁崩れしに
「水」送るすべなきと友「日用品」に真水しのばせ送りてくれぬ
余震ごとに城の石垣崩れ落ち一つ又一つと石が道に近づく
「熊本地震今後も警戒」一と月を過ぎててもテレビの表示は消えず
何事ならん救援車両は赤ランプ「特別高所応援車」がいる
屋根瓦の半分ばかりが揺れ落ちてかぶるシートを叩く大雨
幾重にも崩れ落ちたる石垣の石と槽をライトが照らす

喜屋武岬

當間 實光（沖縄）

六月の摩文仁の丘の岩白し骨を拾いて村に向かいたり 母
喜屋武岬足下に波の砕け散る野辺にむくろの累累たりし夏
死者なれば語ること無き吾が父の哭声のごとき遠き海鳴り
摩文仁野の末枯れし芒靡きたり死者の怨念埋もれたる洞窟
喜屋武岬 此処より先はもう歩めない六月の海は群青にして
戻り来て真壁の村に額撃たれガジュマルの根方に埋められし父
写し絵の温もりの無き父ゆえにガジュマルの根方に手を触れてみる
軍服を脱ぎて逃れよの声拒み義父は手を振り野に去りしと言う